

フィンランド語と民族 (特集・フィンランドの言語と文化)

著者	庄司 博史
雑誌名	月刊言語
巻	14
号	8
ページ	34-42
発行年	1985-08-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5669

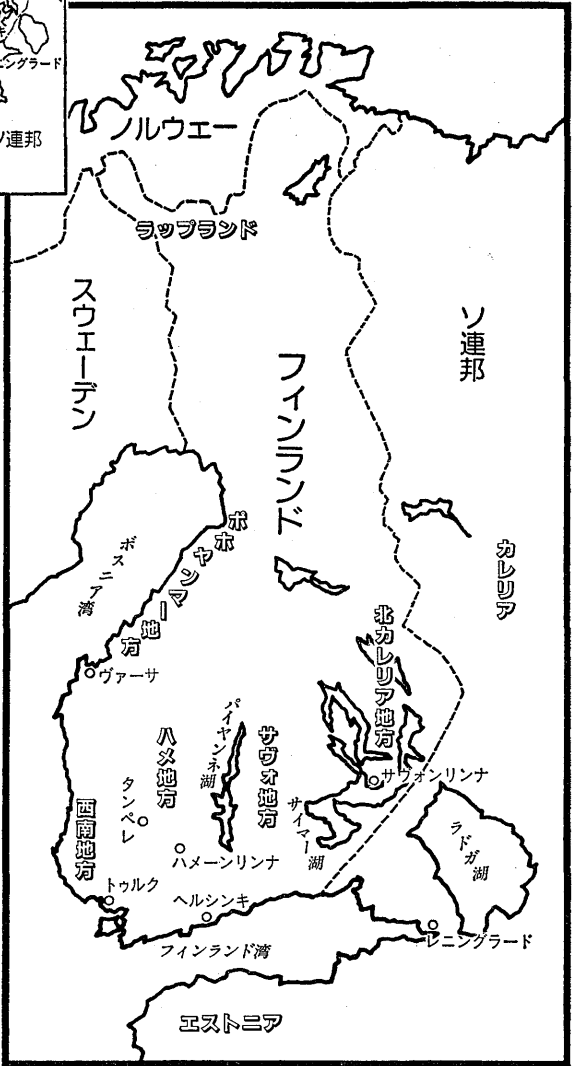
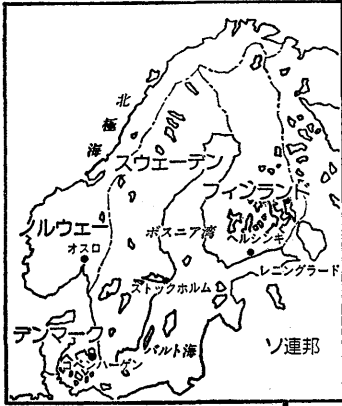
フィンランド語と民族



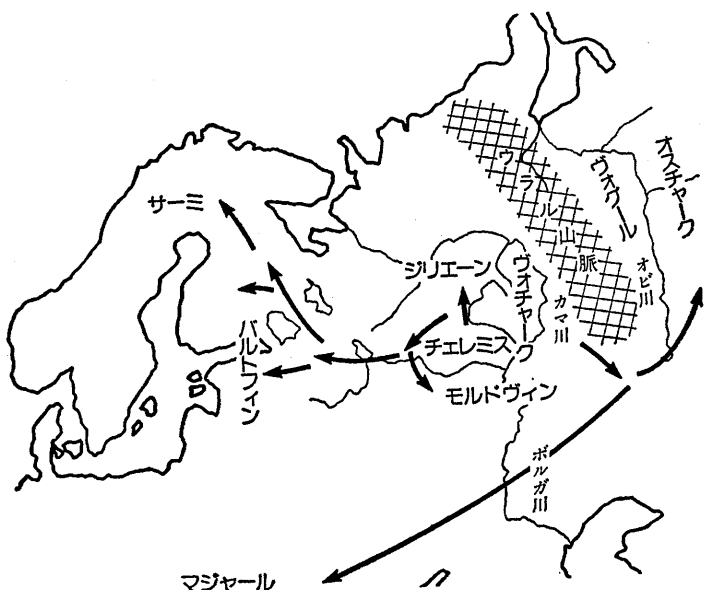
庄司博史

北ヨーロッパの一国フィンランドは人口約四八〇万で、そのうち約三〇万人がスウェーデン語、約二五〇〇人がサーミ語を話す以外はフィンランド語を母語としている。首都ヘルシンキから電車で東に数時間進むとサヴォ、そこからさらに北に一時間で北カリリアと呼ばれる地域に入る。これらの地域は広義で東フィンランドと呼ばれている。このあたりで朝市にでも足を運ぶとパン屋の屋台などにヘルシンキなどでは見かけないカラクッコという大きなライむぎパンが並んでいる。これはまんやかに魚やカブラなどをはさんで焼いたもので東からロシア経由で入ったといわれるが、東フィンランド特有のたべものである。また車で田舎道に分けると、そこには西南部のトゥルクやヘルシンキあたりとは異なった景観が現われる。なだらかな平面に広大に広がっていた農地はここでは、丘や湖に分断され、明らかに堆石質と思われる農地が目立つ。西では、教会を中心に家いえの集まった農村が多く見られたが、このあたりでは、大きい村は見られず畑とともに点在している。そのわりには、うっそうと茂った針葉樹林は少なく、しらかば林が目立つ。しらかばは人家の多いところに生えるいわば雑木であることを知るひとには意外に映るにちがいない。実はこれらは、このあたりで、ところによっては、今世紀初めまで焼畑が行われた跡である。農家の納屋をのぞくと、かつて用いられ

フィンランド



面積：33万7千平方キロ
(日本の0.9倍)
人口：482万人
通貨単位：マルカ



フィンウゴル諸族の分布

たアートルと呼ばれる、ロシアの農民が用いたのと同じ原始的な犁や、木の幹と枝をそのまま利用したまぐわがうち捨てられているのを目にするかもしれない。これらの代りに西では、方形犁や鉄の爪をもつ木枠まぐわが用いられていた。

方言において今も西と東の差は顕著に見られる。たとえば、サウナでは、ほてった皮膚を打つため、しらかばの小枝を束ねたものが用いられるが、これを、西では *vitta*、東では *vasta* と呼んでいる。西方言や文語で語の第一音節に現われる *aa* や *ää* は東では *oa*~*ua* や *ea*~*äa* になる。(*paa* : *pea* 「頭」) 一方、東方言や文語の二重母音 *uo*, *ie*, *yo* は西では *ua*, *iä*, *ya* となり、フィンランドの自称スオミ *Suomi* は *[suami]* と発音される。

このような西と東の違いはいまでこそすくなくなつたが、かつてのフィンランドでは、農具、衣服、住居からたべもの、慣習、口頭伝承や方言にまで広く及んでいたといわれる。実はこの対立はフィンランドで均一な文化や言語が二つに分化したのではなく、フィンランドの民族が西と東からの二つの方向から広まった人々によって形成されたことを物語っている。ここではこのようなフィンランド民族の形成の過程をたどりながら、その言語と文化の輪郭をつかんでみたい。

国名のスオミという語はフィンランドを構成した一部族名に由来している。そのほかにも *häme* (häme) 'サヴォ' (*savo*) 'カレリア' (*karijala*) 族がフィンランド民族の形成に参与しており、これ

らの名は方言や地名に残っている。一方フィンランド湾の周辺にはエストニア (eesti) 人、ヴォート (vafja) 人、リーヴ (liivi) 人、ヴェブシヤ (vepsa) 人などフィンランド人と言語や文化に

おいて非常に近い民族が住んでいるが、これらの人々はすべてバルトフィン族と呼ばれ、言語であるバルトフィン諸語はフィンウゴル語族に属している。この系統に属す言葉としては、スカンジナヴィア半島北部を中心とするサーミ語、ハンガリー人のマジャール語がソ連以外のヨーロッパに話されている。ソ連では、ボルガとその支流域にモルドヴィン語、チェレミス語、ジリエーン語、ヴォチャーク語があり、ウラル東側のオビ河流域にはヴォグール語とオスチャーク語がある。さらにこのフィンウゴル諸語と西シベリアからウラル西部の北極海沿岸にかけて分布するサモエード諸語を総称してウラル語族と呼んでいる。

しかしフィンランド人が周囲のスカンジナヴィア人やバルト人とはほとんど変らぬ外見をもち、文化の面でもヨーロッパ文明の一翼をになう一方で、サモイエード人はモンゴロイドの特徴が著しく、依然として、狩猟やトナカイ飼育を生業とした極北文化を保ってきた。このあまりにもかけ離れた人々の祖先がかつて一つの言語共同体から分れたということがあきらかになるのは、比較言語学の成果を待たねばならなかった。

二

十九世紀の初め印欧語族は言語間の系統関係が明らかにされ一大語族として確立されていた。同じころフィンランドでも次々ともたらされる東の諸言語の断片的な知識から、フィンランド語に似た言語の存在を知り民族の発祥といにしえの姿を求めて、それら言語を話す人々の元に向った学者達がいた。その一人がカストレンである。彼は二度に渡る八年の調査旅行でオスチャーク、チェレミス、ジリエーンなどフィンウゴル諸語やモンゴル、チュルク、ツングース諸語の調査を行ない、サモイエード諸語の膨大な資料を集めた。これらを元にカストレンは文法書や研究論文を次々に発表し、フィンウゴル諸語とサモイエード諸語の系譜を明らかにして、ウラル言語学の基礎を築いた。彼は更にこれらといわゆるアルタイ諸語との関係を信じ、源郷をサヤンとアルタイ地方とした。いわゆるウラルアルタイ説である。しかし、長年に亘るシベリアの湿気と厳冬にむしばまれていた彼は、文字どおり迫り来る死と先を争うようサモイエード語文典の執筆にとりかかったが、六〇〇頁に及ぶ大作の完成を待たず、帰国後二年目三十八歳でなくなった。

カストレンが後継者に与えた影響は大きかった。彼の死後からロシア革命に至る数十年の間に幾人もの研究者がはてしないツンドラやタイガに足を運び貴重な資料を持ち帰った。彼らの資料や

表1 ウラル諸語の語彙の対応例

	フィンランド	サーミ	マジャー	ウラル祖語
嫁	minia	mannji	meny	*minä
矢	nuoli	njuolla	nyil	*ñole
魚	kala	guolli	hal	*kala

研究の成果は結果としてカストレンのウラル・アルタイ説を否定したが、ウラル諸語間の系譜関係をもはやゆるぎのないものとして確立するに至った。そして、ウラル系諸民族のはるか昔の祖先が、どこでどのような生活を送っていたか考古学では知りつくせない貴重な情報を引き出している。

ウラル祖語時代、つまり西暦前四千年頃フィンウゴル祖語とサモイェード祖語に分れるまで、原ウラル人がどこにいたかは定かでないがウラル山脈のあたりであろうとされて

いる。これらの諸語に共通する語彙から当時の人々の生活が想像される。フィンランド語には、*jousi*「弓」、*janne*「筋」、*nuoli*「矢」、*ainna*「魚糊」、*sukai*「スキー」など狩猟用語や *emä*「母」、*isa*「父」、*minia*「嫁」、*vävy*「婿」などの親族用語が残っており狩猟・漁労を生業として親族を集団の基盤とする石器時代の狩猟文化であったことが想像できる。後、原ウラル集団の分裂によりサモイェードの祖先がウラルの東側のタイガへ去ると、あとに残った原フィンウゴル人たちがおち着いたのは、ボルガとカマ川の交わるあたりであろう。この時代にさかのぼる語としては *kota*「テント」家、*pato*「ダム」堰、*voi*「バター」魚の油、*pata*「なべ」、*mesi*「蜜」など数多いが、文化の水準は前とほとんど大

差なかった。またシャマニズムが行われていたことを伝える *noita*「呪術師」がある。彼らは、おそらくその南方に居住していたと思われるインドアーリア系の人々と交渉があったらしく、*yáva*「穀物」(参考、サンスクリット *yáva*)、*porras*「仔豚」、*sata*「百」など共通した語彙がいくつか存在する。

語彙の外にもフィンランド語にはフィン・ウゴル祖語時代にさかのぼる特徴の一部がそのまま、あるいは発展された形で継承されている。音韻面では、語頭音節にアクセントが来ること、音節構造が比較的単純で語頭語末に子音連続が来ないこと、閉鎖子音は無声有声の相関がなく無声音のみであること、そして母音調和の存在がある。造語や名詞、動詞の語形変化は語幹に接続される接辞によって行なわれるのが一般的であるが、これもフィンウゴル諸語に共通している。例えば *talossani*「私の家(複数)」と「*taló*「家」に *-i*(複数)、*-ssa*(内格語尾)、*-ni*(一人称所有接辞)の接続したものである。名詞の格は一五で、そのうち三つは文法格(主、属、対)で九つは場所格である。後者は一般、内部、外部の三つのレベルにおいて静止、離去、接近を示す三つの場の関係を示す格から成り立っている。この三つの場の格の原型はすでにフィンウゴル祖語に位格、離格、向格として存在していた。その外、名詞に接続され所有を示す所有接辞、定活用する否定動詞なども同時代にさかのぼる。しかしかつて存在した双数カテゴリーは消えてしまっている。一方、動詞の分詞や不定詞など

の名詞形が豊富で、これらを用いた、関係代名詞や従属接続詞を伴った、印欧語的な副文に代る古い表現法が存在している。例えば「父の買った本」はこうなる。

isä-n osta-ma kirja
 「父属格」 「買う」 「為著分詞」 「本」

また数詞につづく名詞は単数形であることや、所有表現が「持つ」という動詞を用いず、「私には父がある」のように、所有者を場所格におき、「ある」という動詞を用る表現なども古い特徴である。

Minu-lla on isä
 「私」 「面格」 「ある」 「父」

このあと原フィンウゴル集団は分裂をくり返しながら、各地に定着していくが、その一部はボルガ流域を西に向った。そのうちもっとも西に進んだのがバルトフィン人たちの祖先で、西暦前一〇〇〇年頃までにフィンランド湾の南部から南東部のあたりに現われる。これまでに、彼らはすでに vehnä 「小麦」、kynä 「耕す」、sika 「猪」、lehmä 「牛」や kehätä 「紡ぐ」、jauhaa 「粉にする」、kynys 「敷居」などの語を持ち、農牧業や衣食住において進んだ技術を持っていたと想像される。しかし依然、狩猟や漁労の占める部分は大きく、特にその北部ではトナカイ猟が重要な役割を果たしていた。彼らは、他の原フィン人と別れラドガ湖付近から一足先にフィンランドやスカンジナビア北部へ向ったサーミ人の祖先である。

南に残った後期原フィン人と呼ばれる人々は原サーミ人との関係が断たれる少し前から、印欧系のバルト人との接触は始めており、これ以降ますます強まる印欧族の影響下で文化や言語において確実にヨーロッパ化の道をたどることになる。最初に登場するバルト人はリトアニア人やラトビア人の祖先で、彼らから原フィン人たちは農牧業や建築に関する技術を学んだらしく herne 「まめ」(参考、リトアニア語 žirnis)、「やぎ」、villa 「羊毛」や seinä 「壁」、sila 「橋」などの借用語を取りいれている。そればかりではなく緊密で友好的な関係があったことを物語る moisian 「花嫁」、seura 「仲間」、talkoot 「協同作業集団」なども入っている。

こののち、おそらく紀元前数世紀に始まる後期フィン祖語時代になってから彼らの前に現われたのが、ゴート族かそれと近い関係にあったと考えられるゲルマン人である。ゲルマン人たちのおよびした影響はバルト人たちのそれに比べてはるかに強大で広範囲に亘っていた。借用語として入ったもののうち、農業では aura 「犁」、pelto 「畑」、kana 「ニワトリ」、金属では rauta 「鉄」、kulta 「金」、食物では leipa 「パン」(ハゲルマン祖語 *hlatpa)、「juusto 「チーズ」、住居では latia 「床」、tupa 「部屋」など現代の彼らの生活に欠かさないものが多い。そればかりではない、kuningas 「王」(ハゲルマン祖語 *kuningaz)、「valta 「権力」、kitha 「婚約」(ハゲルマン祖語 *kuningaz)、「hallita 「統治する」」などは影響が単に物のみ

にとどまらず、社会制度にも及ぶものであったことを想像させる。この間に言語も大きな変化を遂げている。後期フィン祖語までにおこった変化としては、たとえばフィンランド語の内部格である内格、入格、出格は本来古い向格 **g* に三つの場の関係を指す *na*, *ni*, *is* が結合したものであるが、同様のことはチュレミス、モルドヴィン、サーミ語にも見られる。重要なものとしては子音の階程交替があるが、これはサーミ語にもみられ、前期フィン祖語にさかのぼるものであることがわかる。

しかし後期フィン祖語時代におこった変化はそれ以前に比べいちじるしいものがある。フィンウゴル祖語の音韻体系はほとんどそのまま前期フィン祖語にまで受け継がれてきたが後期フィン祖語に至って大きな変化がいくつかおこっている。破裂音と関連していた有声摩擦音 **β*, **ɣ*, **ɣ* は音素としてはなくなり他の音でおきかえられた。 *s*, *l*, *n* と相関していた口蓋音との対立は中和され、**ʃ* や **ɣ* は *h* に変化した。また語末の *m* が *n* に代ったため対格が属格と同一形になったり、*ɕ* が *s* となったため、名詞や動詞の語幹末の *ɕ* が複数や過去の標識である *i* と結合した場合など *s* と交替することになり、語形変化に大きな変化が見られることになった。このような音韻変化はゲルマン系の借用語以前の語にはすべてに見られるため、ゲルマン語との接触により引きおこされたとする学者もいる。しかしバルトフィン語、特にフィンランド語は他のフィンウゴル諸語に比べ音韻面では保守的で祖語や

借用語の再構形とは近い形を保ってきた。特に先に挙げたようなゲルマン語の借用語などは最も古い形を留めている。また *e* に対する円唇母音 *ø* が生れたのもこの時代である。形態的変化としては、*i* と結合した三つの外部格が生れている。また形容詞が格と数において名詞と一致するのもバルトフィン諸語の特徴である。

さらに英語の *be* 動詞に相当する動詞の定活用形と本動詞の分詞による複合時制の発達がある。統辞的变化としては、関係代名詞や従属接続詞を用いた副文表現が先の動詞の名詞形を用いた表現と並んで行なわれるようになった。先の *isän ostama kirja* は関係代名詞 *joka* を用いた関係節 *kirja, jonka isä osti* と表現できる。元は SOV であったといわれる基本語順が、バルトフィン諸語では、SVO となっている。これら分析的表現の出現や語順の変化は相互に結びついており、内部からの自然な発達ともとれるが、周囲の印欧語の影響も見逃すことはできないであろう。

三

フィンランド湾の南側、現在のエストニアのあたりに居住していた後期原フィン族も西暦元年前後に分裂を始め、先に述べたようにフィンランド人、エストニア人など現在のバルトフィン諸族の骨格が形成されていった。フィンランドへの移住は現在のエストニアから毛皮を求めフィンランドの南西部に小集団で海を渡ってやって来る人々によってゆっくり始まったといわれる。

最初にやって来たのはハメ族で、海岸から内陸に向い、西暦五〇〇年頃には中部最大のバイヤンネ湖に達した。彼らのあとに南部に移って来たのがスオミ族である。一方東のラドガ湖西部にはカレリア人の居住地が形成されつつあった。かつて、カレリア人は先に西に到着したハメ族やスオミ族の一部であるという説もあったが、現在は東へ陸づたいにやって来たとする説が有力である。こうしてフィンランドの異教時代の終り、十一世紀頃には、ハメ、スオミ、カレリアという三部族が本拠地を構えていたことになる。当時彼らにとつて狩猟は農耕とならんで重要な地位を占めており、川や湖に沿って針葉樹林に分けいり猟地や居住の拠点を増していった。

西ではハメ族が内陸部に向うと同時にボスニア湾岸に沿って北上した。スオミ族は十二、三世紀に隣接する北部にサタクンタ族を形成し、やはり北に向った。一方、東のカレリア族も早くから北東方向のボスニア湾北部にまで足を運んでいたといわれる。さらに東部の湖沼地帯にはカレリア族から分派したサヴォ族が猟地を拡大しつつあった。こうして彼らが西と東から内陸へ、そして北へと進むなかで、フィンランドはほぼ二つの勢力圏に分けられた。しかし、全土に住んでいたといわれるサーミ人はしだいに北への移動を余儀なくされた。

この東西の対立に拍車をかけたのは、西のスウェーデンと東のノブゴロドである。スウェーデンは既に六〜七世紀から西南部諸

島へ植民を行ない、九〜十世紀にはビルカの商人たちが本土への足掛りをねらっていた。こうして一一五五年に異教徒の改宗を名目に行なわれた第一回の十字軍の遠征とともに、フィンランドは西南部からスウェーデンの勢力圏に組みこまれていった。現在ボスニア湾やフィンランド湾沿岸のスウェーデン系の人々は主に十三〜四世紀に移住して来たスウェーデン人の末えいである。すでにスラブ化しギリシヤ正教下にあったノブゴロドは一二二七年カレリア族の強制改宗を皮切りに、スウェーデンとの対立を深めていった。スウェーデンの合計三回の十字軍の遠征や、双方により幾度となく繰りかえされた討伐軍によりフィンランドへの勢力拡大が計られた。その結果一三二三年の講和において、スウェーデンはラドガ湖の西からボスニア湾に至る地域を獲得した。

スウェーデンの支配下に入った地域はローマカトリックとスウェーデンの統治経済圏の一部として組み込まれた。そして東では、フィンランド内部への道を断たれたカレリア人たちとともに、ロシア人から受けた東欧文化の要素がひろがることになった。この国境の西側に入るようになったサヴォ族はカレリアとの直接の交渉を断たれたが、その居住地の急速な膨張には目を見張るものがあつた。当時西南部では中世ヨーロッパ的多圃農耕がおこなわれていたが、サヴォでは豊富な森林と常畑農に不適な地勢により焼畑が重要な地位を占めていた。十六世紀スウェーデンは開墾の振興政策としてサヴォ人の自由な移住を許したため、彼ら

は中部のハメ人の後背地にまではいり込んだのである。現在中部に広がっているサヴォの方言や文化はこれに由来している。

その後十六〜七世紀初頭にかけ国境は東に移された。その際ラドガ湖西北部で東欧文明を土台にはなやかなカレリア文化をおこし、またフィンランド民族形成にも重要な役割を果たしたカレリア人たちの大部分はオロネツ地方や遠くカリーニンに移住した。後者では現在に至るまで伝統文化や言語が保持されている。

こうしてはぼ十七世紀にはフィンランド民族の骨格が形成され、十六世紀カトリックにとつてかわったプロテスタントと十九世紀始めまでつづくスウェーデンの支配のもとに次第に西ヨーロッパへと接近していくことになる。言語でもスウェーデン語を通じてうけたおびただしい数の翻訳借用や意味借用はフィンランド語の語彙体系をヨーロッパ化したといっても過言ではない。しかし冒頭でみたようにハメ、スオミ族を中心とした西と、カレリア族やそれから分派し、それにおおいかぶさるように広がったサヴォ族による東の伝統は文化や言語に今に至るまで保たれてきた。

一般に西の伝統文化はスウェーデンを通じて受け入れた西欧文化、進んだ技術と豊かな農牧業に支えられ、はなやかで、都会的な印象をあたえているといわれる。しかし東部では西に比べ質素で飾り気のない文化が保たれてきた。遠隔地にあったため進んだ技術や流行からとり残され、そして焼畑を主とする不安定で貧しい生活を営んできた人にとっては当然のことであったかもしれない。

い。しかし、一方ではその後進性ゆえに、フィンランド人の、あるいはさらにそれ以前からの伝統がより長く保存されてきたことも事実である。十九世紀末の民族主義高揚時のカレリアニズム、同じころ近代文語に果たした東方言の役割、そして今もなお多くのフィンランド人が東フィンランドに抱く郷愁などは、やはり、そこに彼らが失ったフィンランドの伝統を感じているという証しかもしれない。

(しょうじひろし・フィンウゴル言語学)

●今月の表紙とカット

高橋正人

* 表紙イラスト あやつり人形劇場 *Commedia dell'Arte* イタリヤ。

* 扉カット 時計つき飾戸棚、フィンランド・Osterbotten 一八五七年。

カット p 34 壁かけ飾棚、フィンランド、十九世紀。p 43、
亜麻糸巻き、フィンランド・Sund 十九世紀。p 52、刺繍手袋、スウェーデン、十九世紀。p 62、人体形時計、フィンランド、十九世紀。